

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会

私のテーマ

いろは丸事件の記録（1）



渋谷 雅之

豊川涉日記

豊川涉という伊予大洲藩士がいる。この人物は幼少の時期から昭和5年に没する直前までの日記を書いた。今回から3回に分けて書く「私のテーマ」は、今は失われて無い豊川涉日記のもたらした、いろは丸沈没事件に関する記録をめぐる物語である。詳細は筆者の近著「いろは丸始末」にまとめたので、ご覧くださいである。

豊川涉は大洲藩が幕末に購入したいろは丸に20歳前後の時期、下級船員として乗り組んだ。まだ重い事項を知らざれる立場にはなかつたが、沈没事件の前に土佐藩から回覧された文書や自らの体験を元に、事件の貴重な記録を残した。事件の一方の当事者である紀伊藩の記録は「南紀徳川史」に纏まつたものを見ることが出来るが、土佐藩側の記録は豊川涉の残したもののが全てである。

豊川涉は自ら記録した日記を元にして、出生から昭和3年までの80年にわたる記録「思出之記」を書き下ろした。そしてこの記録が現代に残される。

豊川涉の孫（涉の長女・アキエの子）にあたる望月宏氏により、平成23年に刊行された「豊川涉の思出之記」という書物（創風社出版）は、涉の三男・豊川三郎により保管され、活字化された明治39年頃までの記録と、それ以後の手書き文書のデジタル記録である。

資料の解説その他は望月宏氏の娘（豊川涉の曾孫）・篠原友恵氏により行われた。この記録の「十一歳から三十歳まで」の項目にいろは丸沈没事件の詳細が含まれる。

坂本龍馬関係文書

「豊川涉の思出之記」が発刊された平成23年から86年遡る大正15年「坂本龍馬關係文書 第二」という書物が刊行され、この中にいろは丸沈没事件に関する土佐藩側の記録が収載され、いろは丸研究の原典となる。その記事を掲載順にまとめるところである。

①明光艦海路線図
②土佐守内海援隊長才谷梅太郎
紀伊蒸気船明光丸応接書

③書状（大正七年四、五月・豊川涉より村上是哉宛、檍尾調査より村上是哉宛、豊川涉よ

り檍尾調査宛の三通）
④いろは丸終始顛末

これらの記事は伊予史談会から提供を受けた資料を丸ごと引用したものであることが想像される。④「いろは丸終始顛末」は、豊川涉がいろは丸沈没事件の顛末を日記をもとにまとめて書き下ろしたものであり、冒頭に述べた「豊川涉の思出之記」に含まれる記事と類似するが同じではない。

これらの記録公表までのいき

さつについては書状③から推察することができる。書状に登場する村上是哉と檍尾調査は大洲史談会のメンバーである。

岩崎英重は日本史籍協会の創立に尽力した人物で、日本の史学界で高く評価されているが、成果を以後の批判に供し、後世に引き継ぐという基本的な人文学研究の思想がなかった。

そこで「坂本龍馬關係文書 第二」の冒頭に掲載された①明光艦海路線図（左図）は、以後の歴史書に広く掲載された著名ノ土州藩士ヨリいろは丸船将二対シ明光丸トいろは丸衝突セシノ頗末ヲ報告ノ為ニ幾回ニモ該応接書ヲ回付シ來リタルモノヲ贋写セシメラレ其都度我輩共ニモ回覧ニ付サレタルヨリ一覧毎二不肖方贋写シ置タルモノヲ纏メテ一冊トナシタルモノナリ

その後この資料は伊予史談会（松山に本拠を置く愛媛県の史談会）の手に渡り、昭和3年に「いろは丸航海日記」という和資料を最初に世に出した「坂本龍馬關係文書 第二」は岩崎英重（鏡川）により編集されて日本史籍協会から大正15年に刊行されたものだが、収載記事にはその出典が書かれていない。そ



のため、いろは丸関係の研究に関する豊川涉や大洲史談会の名誉と功績が抹殺された。

岩崎英重は日本史籍協会の創立に尽力した人物で、日本の史学界で高く評価されているが、成果を以後の批判に供し、後世に引き継ぐという基本的な人文学研究の思想がなかった。

そこで「坂本龍馬關係文書 第二」の冒頭に掲載された①明光艦海路線図（左図）は、以後の歴史書に広く掲載された著名ノ土州藩士ヨリいろは丸船将二対シ明光丸トいろは丸衝突セシノ頗末ヲ報告ノ為ニ幾回ニモ該応接書ヲ回付シ來リタルモノヲ贋写セシメラレ其都度我輩共ニモ回覧ニ付サレタルヨリ一覧毎二不肖方贋写シ置タルモノヲ纏メテ一冊トナシタルモノナリ

その後この資料は伊予史談会（松山に本拠を置く愛媛県の史談会）の手に渡り、昭和3年に「いろは丸航海日記」という和資料を最初に世に出した「坂本龍馬關係文書 第二」は岩崎英重（鏡川）により編集されて日本史籍協会から大正15年に刊行されたものだが、収載記事にはその出典が書かれていない。そ

のない記念館に

として～

新館設計者(一級建築士)

能勢 修治さん

新館設計者はどんな人？

毎月、関係者打ち合わせ会のため
に東京から高知へお越しいただき、あり
がとうございます。会が始まるまでの時間、
お忙しい中を恐縮ですが、よろしくお願ひ
します。

新館建設工事が始まり、日々に現場風景
が変わつて行きます。どんな新館ができる
のだろうと皆がワクワクしているところで
す。そして、その新館をどんな方が設計し
たのかというのは、皆さんが知りたいところ
だと思います。私も能勢さんがどういつ
の方なのか、興味あるところです。

ちょっと照れますね（笑）。

私が生まれたとき父は長崎の三菱
重工に勤めていたので、私は2歳ま
で長崎市で育ちました。母方の祖父

は熊本の人ですが、祖母は天草
出身です。長崎の城山という所
で育ち、子どもの頃から歴史に
は興味がありましたね。

大阪府北部に能勢町という町
がありますが、私の父方の一族
はその辺りの出身だと思います。

曾祖父は能勢安次郎といつて、
京都で織維関係の問屋を営んで
いて、同志社の新島襄から洗礼
を受けています。曾祖母は鳥取
の人で、同志社女学校で学び、
受洗しました。そういうご縁で、
墓は同志社の創始者一族と同じ
場所にあります。祖父もクリス
チヤンで、東大卒業後、北海道
に渡りました。三井の北海道炭
礦汽船、いわゆる北炭に勤めま
すので、父は北海道夕張生まれ
です。早稲田大の理工学部で経
営工学を学びました。



面白いファミリービストリー
ですね。坂本龍馬の子孫たちと時代や
動きが重なってきます。もつとお話を深
めたいところですが、話は現在の能勢さ
んとつながつきました。つまり、能勢
さんが建築の道に進んだのは、お父さん
の影響もあったということですか。

外装には日本初のタイルを
新館建設の設計公募では、石
本建築事務所を中心、既存館設計者
である高橋晶子さんのワークステー
ション、若竹まちづくり研究所の三社
で共同企業体をつくり参加していただき
ました。能勢さんは、当館と同じよ
うに海に近い沖縄の博物館を設計した
実績もお持ちです。新館には、会社を
代表する建築家（プリンシバルアーキ
テクト）である能勢さんの実績も反映

記念館は4月から約一年間の休館に入る。開館10周年目
ごろからの懸案であった既存館の全面ニューアルが
始まるためである。昨年10月には、記念館西側の敷地（元
駐車場）で新館建設も始まり、工事は順調に進んでいる。

広く太平洋を望む高知県立坂本龍馬記念館が、今まで
に本格的な博物館として生まれ変わろうとしている。記
念館着工以来約30年を経て、来春には新館と既存館を
合わせてグランドオープンの時を迎えるのである。記念
館はこの春、大きな一步を踏み出した。

そこで、新館設計者である株式会社石本設計事務所の能勢修
治さんに話を聞いた。

私は父の転勤に伴い、広島学院
というカトリック系の男子校
で学びました。理科系が得意で、
美術も好きだったので早稲田大
へ行き、建築の道に進もうと思
いました。卒業すると石本建築
事務所に入り、多くの設計を手
がけてきました。

建物というのは土地や風土に
合つたものであることも重要で
すね。



そうですね。父と同じ早稲田に進んだと
いうことはありますが、祖父の影響もあるで
しょうね。祖父は中国宋時代の陶器をはじめ
美術全般が好きでした。子どもの頃、よく画廊
に連れて行つてもらいましたね。

記念館新館は、スペースの少な
い限られた敷地の中に「堅牢な
箱」を作るイメージで設計しまし
た。外壁は見ると蔵のようにな
見えますが、素材に変化を持た
せます。生乾きのタイルに細かい
砂を押し付け、また、青顔料（コ
バルト）を混ぜて新しい色が出る

世界にも類 ～重要なプロジェクトと

と閉」の妙味を味わってもらいたいです。土地や建物が同面積、同じボリュームの中に、このように対比する二つの館が在るのは世界でも余り例がないと思います。

新旧二つの建物から、「静と動」「開

よう焼きました。日本で初めての試みで、太陽の動きによって微妙な色彩を味わえるはずです。

——先日そのタイルを拝見しましたが、一見すると黒っぽく画一的な色が光線の具合で変化するのが分かりました。一つひとつのが素晴らしいですね。さてズバリ、新館の特長は何でしょうか。

今回一緒に仕事している既存館設計者・高橋晶子さんも言うように、既存館は開放的でやんちゃな兄貴分ですね。山側にある入口よりも、本来は奥側である海に向かって突き出している。つまり、海に向かってアプローチとなっています。

それと逆に弟分の新館は、山側にある入口、つまり人のアプローチに向かって突き出しています。来館者に向かっているのですね。また、「堅牢な箱」と言つても決して重く固くはなく、機能的なつくりとなっています。

私は公募に参加する前、司馬遼太郎の『竜馬がゆく』を読んだばかりでした。設計者に選ばれたとき、「ご縁だなあ」と思いましたよ。

『竜馬がゆく』は、半分くら

——本当に楽しみですね。
先ほどからパソコンで能勢さんが手がけた国内外の建物を拝見しています。トルコのカマン・カレホユック考古学博物館なんて、建物というよりまるで地形の中に建造物が埋め込まれているような…。自然景観にまったく違和感がありませんね。設計に当たっては、土地の歴史なども調べられるのでしょうか。坂本龍馬のことでも調べられましたか。

100年先を見据えた記念館に

い読んだところで、美化されているのではないかと疑問が生まされました。ですから、読後には多面的な龍馬関係や歴史の本を読みました。歴史の事が知りたいという思いですね。第二次世界大戦などへの関心もあります。正確な事実とは何か。詰まるところ、国際情勢を含めた現在を知る手がかりを考えるわけです。

——そういう考え方を持つ設計者がつくる新館とは何か。また、能勢さんの持つ坂本龍馬観とはどういったものでしようか。

ハードとしての永続性、目先の流行に流されない建物を設計しました。100年先を考えた建物です。塩害、日差しといった外部負荷はないという自信があります。耐震に対しても同じです。設計は頭の中で想像していくもので、建物ができるときの感激や感覚は、仕上げるまで

をされている方から、新館や龍馬の話を聞くと、改めて建物が生まれ、変化することへのうれしさが込み上げてきました。これからもしっかりと連携しながらよろしくお願いします。ありがとうございました。

——能勢さんのように大きな仕事をされている方から、新館や龍馬の話を聞くと、改めて建物が生まれ、変化することへのうれしさが込み上げてきました。これからもしっかりと連携しながらよろしくお願いします。ありがとうございました。

能勢 修治 (のせ・しゅうじ)

株式会社登録建築家
建築家協会登録建築家
1960年長崎市生まれ、東京都在住。
早稲田大学理工学部建築学科修士修了後、
新学院幼稚園、カマン・カレホユック考古学
博物館(トルコ)、大正大学3号館、姫能市立
図書館、伊勢フットボールビレッジ、早稲田大
学中野国際コミュニティプラザ、など。国内外
の受賞多数。



インタビュアー

前田 由紀枝

(まえだ・ゆきえ)

現代龍馬学会理事
高知県立坂本龍馬
記念館学芸課長

「描かれなかつた歴史」

宮川 穎一

筆者がいつも言うのは「手紙は書いてあること以上に書かれなかつたことの方が重要だ」ということだ。このことを歴史画にあてはめてみよう。

特別展覧会「没後一五〇年坂本龍馬」の展示準備のために絵巻や瓦版や錦絵について資料を集め、いたときのことだ。池田屋駿動は有名なのに瓦版や錦絵は存在しない。それはなんとなく分るが、京都を揺るがした動乱である元治元年7月の「禁門の変」に関する街地の焼失範囲を示す同時代の瓦版以外は京都の絵師が同時代に描いた「甲子兵變図」（京大）や「近世珍話」（京博）があるくらいだ。これらには政治色はなく町人迷惑が主題だ。明治時代に数多く描かれた幕末の事件（桜田門外の変）や鳥羽伏見の戦い・戊辰戦争に関する錦絵の数量を考えると「禁門の変」を描いた錦絵がほとんど無いのは展览會担当者として不思議だった。

龍馬の期間中に佛教大學の青山忠正先生に博物館へお越いいただき御専門の薩長盟約の真相について講演していたが、その際に「長州は禁門の変に際して御所に発砲した朝敵だった」という概念に関する木戸と西郷のやり取りが云々という青山先生のお



前川五嶺筆『近世珍話』より「禁門の変に際して京都街中を駆ける武士」京都国立博物館蔵

話を聞きながら、はたと思うところがあつたのだ。それは「禁門の変」の歴史画（錦絵）を描くことは長州藩が御所に攻めかかる行為を描くことであり、「長州藩が朝敵であった過去の素性」をさらすことになるために、維新後、明治政府がそれを描かせなかつたのではなかろうか? ということだ。あるいは「長州軍不敗神話」でも作ろうとしていたのだろうか。一方、文久3年8月の政変による「七卿落

ち」の絵はやたらと多い。こちらは一度朝廷を追われた三条実美ら尊攘派の公卿と長州藩がやがて復権して明治新政府をつくったという敗者復活の物語の冒頭を飾る象徴的な絵だからであろう。

「禁門の変」が錦絵に描かれたことは、一度朝廷を追われた三條実美らが主題にはどうやら深い「歴史的な意味がある」らしい。

コラム・龍馬のこと

「龍馬暗殺犯が高知に…！？」

教員OB 宮 英司

龍馬没後150年の今年。改めて「犯人は？」という話題が沸騰している。最近では、今井信郎の自白から京都見廻り組の佐々木只三郎主犯説、そして命令を下したのは手代木直右衛門…等々が代表的な意見かな、と感じているがみなさん如何だろうか。

ところで、その手代木直右衛門（1826～1904）が高知で暮らしていたことは意外と知られていない。会津藩士佐々木源八の長男であったが、父の兄の手代木家へ養子に入り、手代木姓となった。京都見廻り組の与頭で、龍馬・慎太郎の暗殺に直接関わったとされる佐々木只三郎は実弟。

直右衛門は23歳で会津藩の御供番となり、28歳で藩主松平容保の側近として仕え、38歳の時からは京都守護職となった藩主のもと京都会津藩の公用人として京都市中の警護に当たった。そして、見廻り組のみならず新選組も配下に収めていたとされる。このように幕末の混亂期に活躍し、将軍慶喜から刀や服地、功労金を賜ったという記録が残っている。会津藩に帰藩後は、会津戦争において若年寄として籠城を指揮し、降伏後には使者として板垣退助と会談し、戦争終結に導いた。その後、責任を問われ、岐阜・名古屋・青森と移監された。明治6（1873）年の特赦後は新政府に出仕、香川県権参事を経て、同年7月20日に高知県七等出仕。翌年1月21日、岩崎権令のもとで高知県権参事（副知事役）となり、明治9（1876）年10月まで務めた。この間、権令の交代期に10日間だけ権令代理も務めた。その後、岡山県に移って郡長と区長を歴任、明治27（1894）年退官した。明治37年6月3日病没。79歳。岡山市笠山に墓がある。

龍馬暗殺を命令した人物とされる手代木直右衛門。高知で暮らした3年と3か月の間に龍馬や慎太郎に思いを馳せることもあったのではないだろうか。県庁から坂本家までは数分の距離。それにしても歴史とは不思議なものである。

“話してみるかよ”

「面が割れたか、割れないか」

小美濃 清明

「面が割れる」とはその人物が誰であるかわかるることであり、氏名や身元がわかること、と辞典にはある。

最近発見された暗殺五日前、坂本龍馬が福井藩重臣、中根雪江にあてた手紙の追伸には「今日、永井玄蕃頭（げんぱのかみ）方へ訪ねていったのですが、御面会は叶いませんでした。」と書いている。

永井は永井尚志（なおゆき）で、慶應3年2月3日に若年寄格になっている。幕府中枢の重臣である。

当時、永井は京都のどこに宿泊していたのだろうか。二条城には十五代將軍・徳川慶喜があり、慶應3年10月14日、朝廷に大政奉還を上表した。

おそらく、永井は二条城に近い寺社に宿泊していたと思われる。

龍馬は11月10日、永井を訪ねたが、大政奉還後の多忙な永井に会えなかった。宿泊している屋敷の玄関で面会を求める龍馬は「才谷模太郎」を名のっている。

永井の返答を待っている間に、幕府の役人たちが龍馬の近くを通らなかったか。

龍馬は「才谷模太郎」として、取り継ぎの幕臣と会話している。龍馬は「面はまだ割れていない」と確信していたが、永井の返答を待つ間に「面が割れたか」と思う瞬間があったかもしれない。

斬りむすぶ刀の下ぞ地獄なれ

ただ斬り込めよ 神明の剣（石舟斎）

この心境だったと思われる。

「第9回 高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会 研究発表会」 開催のお知らせ

日時 2017年5月27日(土)10:20～総会(会員のみ) 11:00～研究発表会 17:00終了
会場 高知市文化プラザ かるぽーと(小ホール) ※会場変更にご注意ください。
定員 120名(参加無料・要申込)

お申込み・お問い合わせ

高知県立坂本龍馬記念館・
現代龍馬学会事務局

TEL 088-841-0001 FAX 088-841-0015
MAIL gendai-ryoma@kochi-bunkazaidan.or.jp